

日本文學者評傳全書

在原業平・小野小町

井上 豐 著

青梧堂

昭和十八年 一月十五日 印刷
昭和十八年 一月廿日 發行

(三〇〇〇部)

●定價 壹圓八拾錢

在 小 原 野 業 小 平 町

出文協承認ア401030號

著 者 井 上 豊みのる

發 行 者 青 梧 堂
東京市日本橋區通一ノ五東海ビル

代表者 宇都宮德馬

印刷者(東東二四)矢 島 勇 三 郎
東京市豊島區巢鴨町五ノ一〇八二

配 給 元 東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發 行 所

東京市日本橋區通
一丁目五東海ビル

青 梧 堂

電話日本橋 一六九六番
振替東京 一六〇三四番
會員番號 一一四〇一〇番

本 製 根 關 所 刷 印 島 矢

在 原 業 平
小 野 小 町

本書の目的とするところは、日本天才の源流たる業平小町が詩人的
たましひの追求である。

目次

序	五
一、六 歌 仙	九
二、業平の歌風	四一
三、業平傳説	七一
四、伊勢物語	九一
町の歌風	一一七
町集について	一一五
七、町の生	一六三
八、町傳説	一九五

九、附 錄

イ、業	平	集	………	三五
ロ、小	町	集	………	三九
ハ、壯	衰	書	………	二六四

序

業平小町といへば妙な顔するひとがおほい。日本人には長所もあり短所もあるが、自分のもつてゐる寶をわすれるのは短所のひとつであらう。李杜韓白あるひはバイロンゲーテは神聖をかすべからぬもののやうにかんがへるが、業平小町は苦笑ではうむらうとする。おもふにこれは國土に根ざす理想が確立してゐないため、理想が海彼にのみもとめられ、したがつていたづらに遠國にあこがれるのみで、傳統も現實もいかしえないのであらう。もつともこれはひと頃まへまでのことで、今は大分傾向がかはりつゝあるのはよろこばしいが、業平小町まではまだ反省がとゞいてゐないやうである。

業平小町の時代は和歌史的にいへばいはゆる六歌仙時代にあたり、ふたりは六

歌仙中最高の地位をしめる。

普通古今集の歌を、よみ人しらすの時代、六歌仙時代、古今集撰定時代、の三期にわかち、よみ人しらすの時代の歌風を純真素樸としてとくにたふとぶ傾向があるが、實際においてはよみ人しらすの時代は漢詩文の風をうけて技巧にかたむいたあとがみえる。さうした頽勢に詩精神をふきこみ、延喜における和歌再興の機運をみちびいたのが六歌仙である。萬葉の遺風が技巧化して古今集がうまれたのではなく、技巧化散文化の奈落から詩精神をとりもどすことによつて古今集の出現をみたのであり、六歌仙はそのさきがけをなすものであつた。六歌仙は實に萬葉集から古今集への橋わたしとなつたのであり、その筆頭たる業平小町は後代和歌の光源をなすばかりでなく、日本天才の源流といつてよい。吾人はその靈者とむちふことによつて文化の理想をおもふべきである。

業平については伊勢物語が立派な傳説をつたへてゐる。伊勢物語の業平も卑俗化されたところがあるが、後世伊勢物語以上の業平傳説をつくることはむづかしからう。小町については伊勢物語のやうなのがない。たゞ黒岩涙香の小野小町論は論文によるみごとな創作であるが、將來何人かによつてこの薄幸な天才の純粹な彫像のきざまれんことを希望する。

編者から松宮觀山を全書にくはへたらとの話があつた。觀山は文學者としては無理があるので、丈草か小町といふことになつたが、丈草は決定済みで、小町にきまり、業平がくはゝつた。ものすきにみえさうでよわつたなとおもつたが、ながく眞淵研究をつゞけてきて、資料に壓倒されがちでくるしくなつてゐたので、資料不足のものをあつかふのも息ぬきになりさうだし、衆愚の土足にけられつゞけてきた天才の靈をとむらふ義務をも感じてひきうけた。暑いときの執筆のため

ものぐさになりがちであまりみごとなできばえではないが、なにか資するところがあればとおもふ業平小町はきは物めいてきこえるので、表題は六歌仙とでもしようかとおもつたが、まにあはなかつたらしい。

なほ編者として勞をとられた鹽田良平氏、小町關係の資料について配慮をえた風巻景次郎氏にあつく謝意を表したい。

昭和十七年十一月

著 者 識

(一)

六

歌

仙

一、六 歌 仙

仁明天皇の嘉祥二年奈良興福寺の大法師等が天皇四十の寶算を賀するため、佛像陀羅尼經および浦島吉野柘媛等の像をたてまつたが、そのときよみそへてだした長歌が續日本後紀にのつてゐる。五七調で、人麿の影響がいちゞるしく、日本の國體をたゞへ、尊皇思想國粹意識がみえるが、なかに、「日本乃ヒノモトノ 倭之國波ヤマトノクニハ

言靈乃コトダマノ 富國度會サキハツクニトゾ 古語爾フルコトニ 流來禮流ナカレキタレル 神語爾カムゴトニ 傳來禮流ツタヘキタレル 撰者が右

歌をあげたあとで、「夫倭歌之體、比興爲先、感動人情、最在茲矣、季世陵遲、斯道已墜、今至僧中、頗存古語、可謂禮失則求之於野、故採而載之、」とのべてゐるのは、平安時代初期における歌界の傾向をものがたる言葉として注意される。浦

鳥や柘媛のことも歌によみこんであるが、かうした傳説や歌謠の類はかへつて僧院などに命脈がつたはつてゐたのである。

萬葉集以後ことに平安時代にはいと急に和歌がおとろへ、漢詩文がさかえだしたについては種々原因がかんがへられるが、光仁天皇以後近江朝系統が勢をえ（光仁天皇は天智天皇の御孫にあたる）歸化人文化の進出がいちぢるしく、和歌と縁のふかかつた大伴氏その他舊族のおとろへたこと、新都による生活の變化、朝廷の内外に事がおほく、いきほひ文化も尙武的實質的になつたこと、などがおほきな原因であらう。その點奈良時代文化の爛熟にたいする反動といつたところもみられるが、これもしばらくのことで、やがて貫之等による固有文藝の復興となり、奈良時代以上の文化爛熟時代を現出する。六歌仙はその過渡期にあらはれ、貫之等による文藝復興のさきがけとなつた。

古今集の假名序に、「今の世の中いろにつき人の心花になりけるより、あだなる歌はかなきことのみにてくれば、色ごのみの家にうもれ木の人しれぬこととなりて、まめなる所には花すゝき穂にいだすべきことにもあらずなりたり」とあり、眞名序には、「至_レ有_下好色之家以_レ之爲_三花鳥之使_一、乞食之客以_レ之爲_三活計之謀_一、故半爲_三婦人之右_一難_レ進_三丈夫之前_一、近代存_三古風_一者纔_三二三人而已_一。」とみえる。眞名序の方が誇張があるだけにはつきりしてゐるが、とにかく艶書がはりになつたり、藝人遊女の口のはにのぼる以外に和歌はほとんどかへりみられず、はかないもてあそびぐさとなつてゐたのである。流布本歌經標式のをはりに孫姬式の序文（前半）といはれる文章がのせてあるが、なかに「衣通比咩_{（そとほりひめ）}之歌被_三管絃_一而猶存_一」とあるやうに、遊人たちは樂器にあはせて古歌をうたひあるき、古歌はうたひものとして命脈をたもつてゐたことがしられる。古風の傳統は寺院にもこのされてゐたが、寺院はかうした遊人のおもな根じろでもあつたであらう。現世否

定の増院と歌謠の類との結合は奇妙におもはれるが、當時の寺院は一面浪漫精神の宿驛であり、宗教藝術といつたやうなものゝほかに、あらゆる藝術の淵叢となつてゐた。すなはち寺院そのものが本質上浪漫的藝術的であり、寺院に衰退時代における歌の命脈がたもたれてゐたことも、六歌仙のうち二人までが桑門であることもさういつた事情にもとづくともみられる。(宮廷と寺院と密接な關係のあつたこともかんがへねばならないが。)

もつとも宮廷においても和歌がまつたくかへりみられなかつたのではなく、宴會などの場合に天皇皇后以下親王や、大臣等も時には歌をよんでゐるが、凌雲集文華秀麗集經國集などつき／＼に勅撰の詩集がえらばれたのにくらべると和歌は實に影のうすいものになつてゐる。

古今集にのせられたよみ人しらすの歌には奈良時代の末から平安時代のはじめごろにかけての古い歌かおほいとされ、さうした點から眞淵なども相當におもん